

デフォルト解釈の見直し

児 玉 徳 美

1. 推論過程におけるデフォルト解釈

言語知識を含め、人間のもつ知識は階層をなす概念網 (network of concepts) からなる。例えば「金曜日」「3月」の意味を知るには曜日やカレンダーの知識が必要であり、「イヌ」は4本足の哺乳類でしばしばペットとして飼われるとみなされる。walk, swimは動詞であり、自動詞か他動詞に用いられ、定形動詞としては常に現在形か過去形になり、主語を伴う。知識は一般的なステレオタイプとして各部類の成員に共通する特徴でもある。

現実世界において同じ特徴を共有するものが1つの範疇を形成し、人の心に1つの概念を生み出していく。範疇化に基づく多様な概念は語によって表示され、語の意味として記憶される。人は範疇間の階層を組織し、ことばを介して知識として記憶される情報を駆使し、複雑な推論を行なう。概念網・ことば・記憶・推論の諸能力がことばを用いる人間の大きな特徴である。

推論はある概念や命題を根拠に他の概念や命題を導き出す。この場合の根拠は言語によるとは限らない。言語に付随する行為、場面の情報、あるいは言外の背景知識や信念体系でもありうる。3種の推論が存在する。第1は法則 (三段論法の大前提) と事例 (法則の一部を構成する小前提) から結論を導く演繹的推論 (deduction) である。第2はいくつかの事例がほぼ同じ結論を招くことから法則 (一般論) を導く帰納的推論 (induction) である。第3は第1と第2の中間的なもので仮說的 (または遡及的) 推論 (abduction) と呼ばれる。ここではAならばBという不確かな仮の法則を前提に、現実の結論であるB (後件) が仮の法則であるA (前件) の事例であると推論する。例えば「今寒い」(結論) が、これは「雪が降るといつも寒い」(仮の法則) ことから「今雪が降っているにちがいない」(事例) を推論する。現実には「北風が吹いて寒い」場合もあり、法則 (仮説) は絶えず修正されていく (詳しくは児玉2002:154参照)。

上記の推論過程は確かな根拠に基づくか否かにおいて3種の間や各種の事例の間で精粗の違いがある。不十分であいまいな情報しかない場合でも、不確かな事態や出来事について直感的にその蓋然性や数値を推論・予測することがある。この推論過程は主として仮說的推論によるものであるが、日常生活でしばしば用いられ、「推断」(heuristic) と呼ばれる。例えば選挙結果や株式相場を予測したり、視界の不透明な時に距離や図形を目測したりする。その際、蓋然性や数値を算定する妥当な理論や法則をもたないまま推断したりする (詳しくは児玉2006a:20参照)。直感的判断において錯誤を犯すこともあれば、一様に似た判断を示すこともある。推断を可能にするメカニズムとしてどのような因果関係や判断基準が働いているかを究明することも重要な課題である。

階層をなす概念網を用いて思考・推論・連想すると考えた場合、多様な情報が網の目のようにつながって事態や出来事について1つのフレームを形成する。このフレームはさらに事態や出来事の参加者や環境を含む場面情報、あるいは話し手・聞き手の背景知識や信念体系によって別のフレー

ムと重なりながら一連のフレーム網 (frame network) をつくっていく。多様な概念や命題はどこでつながり、どこで無関係なものとして無視されるのか、あるいは人は何を語り何を語らないのか、何に耳を貸し何に耳を貸さないのか。ことばを手掛かりに推論過程を明らかにするためには、ことばに直接現れるか否かに関係なく、照応による指示関係、階層をなす概念や命題の包摂関係・類似性、因果関係、参与者の関心・価値観などの文脈情報を知る必要がある。

知識が範疇に対するステレオタイプとして蓄積されているため、特定範疇のタイプ (type) は多くの人にとって共通である。われわれは現実世界でそれぞれの範疇に属する事物・事例・出来事であるトークン (token) に遭遇するが、個別具体的なトークンに最も適合する知識として概念化されているタイプを探っていく。ここでは最適原則 (best-fit principle) が働いている。例えば話しことばで /b/ の音を聞くと、その音を dread の /d/ でなく bread の最初の音と整合させ、 /bi:/ の音を聞くと、前後の文脈の中で語彙知識として蓄積されている be (be動詞) か bee (ミツバチ) か、あるいはアルファベットの b であるかを最適原則に従って決定している。

タイプとトークンの関係はある範疇をなす部類とその成員であるが、同時にモデルとその例示という階層関係をも構成する。最適原則によりタイプとトークンが関係づけられるが、トークンは必ずしもタイプのすべての特徴を有するわけではなく、タイプからの逸脱も許される。例えば交通事故で足を1本失った、3本足のイヌも、いったんイヌとみなす場合、逸脱した特質以外の面ではイヌの特質をすべて含むものとみなされる。このように特定の事物が例外的情報を除いてそのモデルであるタイプのすべての特質をもつとみなすことは特質継承の原則 (principle of inheritance) と呼ばれる。われわれはこの特質継承の原則により日常生活で接する外界の事物に対して、実際の経験によって得る情報よりはるかに多くの間接的情報を得ていることになる。例えばAがモデルBの例示であり、さらにBがモデルCの例示であると知ることにより、われわれはAがモデルCの例示であるという一連の推論を行なっている。ここでは実際の言及や観察によらない情報も含まれているため、Hudson (1990:30) は特質継承の原則を「デフォルトによる特質継承の原則」(principle of default inheritance) と呼んでいる。このデフォルトによる推論は先ほど述べた「推論」によるものが多く、他の状況からまちがいであるという証拠が出ない限り保持される。デフォルトによる特質継承の原則は人間に限られた証拠(経験)しかもたないのに、なぜこれほど多くのことを知りうるのかという「プラトンの問題」に答えることができるし、同時に誤ったモデルに基づいたり、例外的情報以外の特質を無視して偏見や誤解を生んだりする「オーウェルの問題」の要因にもなる。

要するに、デフォルトとはある情報が欠如していても、その情報が推論によってあたかも既定値のように扱われるものをいう。デフォルト解釈(あるいはデフォルト推意)は最適原則や特質継承の原則と同じく言語表現固有のものではなく、人間の思考・行動のあらゆる面で行なわれている。言語表現におけるデフォルト解釈とは言語表現に欠如していても、話し手・聞き手が現実世界の知識、認知能力の制約、価値観などの信念体系などに従って言外の意味を推論し解釈することをいう。本稿は文内・隣接する文間や談話の言語表現全体の中で何がデフォルト解釈を可能にし、何が不可能にするかその境界を明らかにしようとするものである。

これまでデフォルト解釈は好まれる意味の確定、語の共起制限、項構造、言外の推意などにおいて統語論・意味論・語用論などで散発的に扱われてきた(例えば児玉2006a:73-77参照)。そのなかには認知的に決定されたり社会文化的に決定される推論や諸言語に共通したり諸言語で異なる推論もある。推論過程が言語活動の全域で働いているとすれば、思考・表現・指示において推論フレーム

を形成する原理が存在するはずである。その原理に接近するためには従来散発的に論じられてきたデフォルト解釈を見直す必要がある。

Jaszczolt (2005) が意味論において初めて『デフォルト意味論』という本を出したのがつい最近であるのに、「デフォルトの見直し」というのは少し先走りしていると思われるかもしれない。しかし推論フレームが言語活動で重要な役割をはたしていることは今に始まったことではない。主要な関心は推論過程を言語分析にどのように位置づけるかということにある。ここには2つの課題がある。1つは語・文から談話にまで分析対象を拡大して推論を考察することである。その点、Jaszczolt (2005) が対象とするデフォルトの意味も従来の語用論と同じくせいぜい隣接する2・3の文までに限定されており、談話全体にまで及んでいない。第2の課題はデフォルト解釈を言語分析にどのように位置づけるかということである。そのためには言語表現において言語知識、認知過程、世界についての背景知識、信念体系などがどのように推論フレームを形成しているかについて統一的な原理を探る必要がある。本稿はまだ原理を提案するまでに至っていない。その前段階である。

2. 文内の場合

われわれがことばを用いて情報伝達する際、必要な情報をすべて表現しているわけではない。言外の意味を含めて生成解釈している。また多様な意味を有する語が結合して文をつくる際、語の多様な意味が特定の意味に限定されたり、逆に新しい意味を生み出したりする。実際の言語活動においては意味の生成解釈にあたって次の作業が進行している。

- (1) a. 言語固有の意味・用法として情報伝達上必要な情報と不要な情報が区別されている。
- b. 言語表現の生成解釈が言語知識のほかに認知能力・世界についての知識・場面などの非言語的情報により補なわれる。
- c. 意味の選択や制限が共起する語句・構文や言語使用者個人（話し手・聞き手）の意図・価値観などの文脈情報に基づいて決定される。

(1a-c) は密接に関連しており、その境界は必ずしも明確ではない。図式的にいえば、(1a) は言語情報として情報伝達的前提であり、(1b) は非言語的情報と関連し、(1c) は意味が共起する他の語句や言語使用者と関連する。いずれの場合も最適原則や特質継承の原則などの推論に基づいて言語表現の(不)適格性が決定されている。文構造内の表現を対象に(1a-c)の用例を考察してみよう。

まず(1a)に対応するものからみていく。

- (2) a. John put a book on the desk. vs. *John put a book.
- b. He is a friend [neighbor] of hers. vs. ?He is a friend [neighbor].
- c. a male nurse vs *a female nurse
- d. The house was destroyed. vs *The house was built.
- e. 太郎は私の教え子だ。vs *私は太郎の恩師だ。

(2a) の(不)適格性の違いは動詞putが語彙特性として有する3項構造が守られているか否かによる。(2b) の名詞friend, neighborは本来それとの関係を示す語句（つまり動詞に必須の項に対応する語句）を必要とする。(2c) のnurseは常に女性を示すわけではなくmaleとの結合はよいが、femaleによる修飾は従来nurseが女性であったことから余剰的とみなされる。(2d) は主語が発せ

られた段階ですでに家が存在することが前提になっている。したがってbuildの場合、その前提が述部で断定されただけで価値ある情報が何も付加されていないため不適格となる（詳しくは児玉2006a:74参照）。a destroyed house vs *a built houseなどの名詞句も同様に解釈される。(2e)の「教え子」や「恩師」には「人を教える」主語や「人が師として恩を感じる」経験者が必要とされ、英語のpupil, teacherにそのまま対応するものではない。

次に(1b)に対応する用例をみてみよう。

(3) a. a cow by the tree vs *an animal by the tree

b. I met a woman at my office. ⇒ She wasn't the speaker's wife [mother, sister, etc.].

c. I broke a finger yesterday. ⇒ The finger was the speaker's.

d. I didn't run a mile. vs He didn't get up at six.

e. John began the novel. vs ?John began the dictionary. vs *John began the stone.

(3a)は「木のそばの牛」を見ているときの描写である。cowが基本範疇であり、cowに代わるanimalは範疇が一般的すぎて不適格となる。(3b)の文は通例⇒後の文の意味の含みをもつ。もし「会った女性」が「私の妻・母・妹など」であれば、「必要なだけの情報を提供せよ」という原則にそって基本範疇を用いてそういったはずであるが、会ったのが「ある女性」という以上、その女性は基本範疇と異なるだれか別の女性となる。他方、(3c)は通例「私の指を折った」を含意する。「私の指」でありながらmy fingerと叫びないのは、英語の「属格+名詞」を用いると指を1本しかもっていないというまちがった示唆を与えるためであり、また自分の指を折ることは現実によくあることであり「必要以上の情報を提供するな」ということからa fingerとする。(3b,c)はそれぞれQ推意、I推意と呼ばれる（詳しくは児玉2004:110参照）。もっともこの推意は(3b,c)の後でbut she was my wifeやbut it wasn't one of my fingersと続けて否定することも可能である。(3d)は数量表現と共起する否定語のnotのふるまいが異なる。前の文は基準値(1マイル)の手前で止まり、vsの後の文では事態が基準値(6時)を超えるところまで至っている。この違いはnotに責任があるわけではない。基準値が努力を必要とする目標であるのか、それともほうっておけばずると下がっていくような事態と捉えるのか、現実世界の捉え方の違いに由来している（詳しくは安井2004:158参照）。(3e)の初めの英語はthe novelの前にreadingやwritingがないが、novelの目的役割や製作役割に基づいてデフォルト解釈され通例「小説を読み／書き始めた」の意味になる（児玉2006:75参照）。しかしnovelに代えてdictionary, stoneとした場合、「何を始めた」のか欠如要素を補ないにくいためか英語では不自然とみなされる。

次に(1c)の用例をみてみよう。

(4) a. The plane taxied to the terminal. (飛行機は誘導路を移動しながら空港ターミナルへ向かった。)

b. I'll fix the date of departure (for Monday). (出発日を(月曜日と)決めよう。) vs I'll fix your watch. (時計を修理してあげよう。) vs I'll fix you a drink. (飲み物をつくってあげよう。)

c. John belched his way. (ジョンはげっぷをしながら歩いて行った。)

d. 客 vs guest (泊り客)、visitor (来客)、customer (顧客)、client (弁護士などの依頼客)、patient (患者) / practice vs 実行、慣行、業務、練習

e. run : 走る、走って行く、競走に出る、流れる、動く ; …を走らせる、流す、経営する ; 走ること、運行、得点、連続公演 / water : 水、水域、川、体液 ; 水をまく、水を飲ませる、分泌液を出す

(4a) の英語の *plane* (かな、平面図)、*taxi* (タクシーに乗る、水上を滑走させる)、*terminal* (終着駅、コンピュータの端末) は単語だけ取り出せばそれぞれ () 内の語義も有し多義であいまいであるが、ここでは文末の日本語訳の意味になる。この解釈に至るまでには、文の意味を論理的に辻褃の合うものにするために各語義の組み合わせや現実世界の知識などを基礎に仮説的推論を働かせている。(4b) では目的語が1つか2つかの構文、またその目的語の意味役割との関係で *fix* の語義が変化している。(4c) の *belch* は本来自動詞であるが *one's way* がつくことにより *one's way* 構文としての新たな意味が *belch* と結びついている。(4a-c) は語と構文の意味が辞書部門 (lexicon) において長期記憶され、他の語句との結合により意味が確定することを示している。つまり他の語句との関係で特定の語義が選択されたり、新しい語義を拡大していく。もっとも、語義がどのように拡大するかは必ずしも明確ではない。(4d) では日英語で語義の拡大が異なる。その結果、日本語の語が多様な英語に訳されたり、その逆の現象が起こる。(4e) からうかがえるように、一般に英語は1語の有する語義が日本語よりはるかに多く、さらには日本語にない特徴として同じ語形がしばしば複数の品詞に用いられる。(4d,e) の多義語において意味がどのように選ばれ特化されるかは (4a-c) と同様である。

語義の拡大には大きく2つの方法が存在する。1つは隠喩や換喩により1語がその意味を拡大する方法である。あと1つは他の語句との結合である語彙連結 (collocation) により新しい意味を獲得していく方法である。英語はいずれの方法においても日本語より自由に、また柔軟に語義を拡大している。英語は1語の有する意味が豊富であるため語義を確定する際には言語的文脈への依存度が日本語より大きいといえる。どの言語も非言語的文脈に依存するが、日英語ではその中身が異なる。このような点については § 4 で考察する。

3. 文間の場合

隣接する2・3の文の間でデフォルトによる推論過程がどのように進行しているのでしょうか。本節は (1a-c) に対応する文間の例を考察する。ここでは節 (clause) も文とみなす。

まず (1a) に対応するものとして次のようなものがある。

(5) a. John took a train from Paris to Istanbul. He has family there. vs ?He likes spinach.

—— Kehler (2002)

b. I lost my watch, but I have it with me now. vs *I have lost my watch, but I have it with me now.

c. If you have lost your passport, you're going to have a lot of trouble with the police. vs *If you accept that job, you're going to regret it. —— Wada (2001:236-238)

d.*My grandmother wrote me a letter two days ago and six men can fit in the back seat of a Ford. —— Lakoff (1971)

e. We've been wondering how many people can get into the back seat of a Ford and my grandmother decided to try the experiment. She tried it two days ago and she wrote me a letter yesterday and six men can fit in the back seat of a Ford.

—— Kempson (1975:58-59)

(5a) の対になっている最初の例はジョンが家族に会うためにイスタンブールに向かっていると解釈されるが、後の文はジョンがイスタンブールに向かっていることとジョンがハウレンソウが好きだということが現実世界の経験で結びつかないため不自然になる。(5b) の最初の文で過去形は時計をなくしたのは過去で *I may have my watch or may not.* を前提とするため現在その時計をもっているのも不思議でない。しかし後の文は現在完了で *I don't have my watch with me* を含意するため *but* 以下と矛盾する。(5c) の *be going to* は未来に生じる *to* 以下の事態が発話時にすでに始まっていることを示す点で *will* と異なる。対になっている最初の例は「パスポートを失った」のが発話時前に起こり、それが原因で今後面倒になるとして適格であるが、後の例は「その仕事を引き受ける」のは発話時後のことになり、*be going to* と矛盾して不適格になる。Lakoff (1971) は2つの節が *and* で結ばれる場合、共通の話題が前提になっていなければならないのに、(5d) はそれに違反しているとした。これに対して、Kempson (1975) は共通の話題である必要はなく、非文の (5d) も (5e) のように適切な文脈が与えられると文法的になると主張した。確かに (5e) では Kempson のように A and B で結ばれた下線部の2つの節に A・B 共通の話題はないが、下線部の節 A・B と前文の異なる部分との間には、Lakoff のいうように、それぞれ別個に共通の話題がみられる。

次に (1b) に対応する例で文間の意味が非言語的情報に支えられて成立する場合をみてみよう。

(6) a. He ate three carrots—— in fact he ate four vs *none.

b. The noise of the gun frightened off the birds. The birds flew away. vs The birds swam away. In fact, they were swans. —— Levinson (2000:45)

c. John unpacked the picnic. The beer was warm. vs ?The book was heavy.

d. Sue walked into the room. The chandelier was magnificent. vs ?It was in the cupboard.

e. A: What did she say?

B: The bus is coming. / That man has a gun.

(6a) は (3b) と同じ「必要なだけの情報を提供せよ」という原則に従った Q 推意の例である。2 番目の節で断定した数量である *three* はそれより上の数量の推意が許されるため取り消し可能で *four* と言い換えることができるが、*three* より下の数量は *three* と断定しているため *three* の取り消しが不可能で *none* は不適格となる。(6b) は (3c) と同じ「必要以上の情報を提供するな」という原則に従った I 推意で仮説的推論によるものである。通例銃声に驚き、小鳥は飛んで逃げたと解釈されるが、特殊な場面では *birds* が実は *swans* であり、泳いで逃げたとも解釈され、*vs* の後の表現も可能である。(6c,d) の2番目の文の主語は初出の名詞であるが、まるで旧情報であるかのように *the* がついている。(6c) の場合、*picnic* (野外パーティ) から *beer* は含意されるが、*book* は含意されないため不適格であり、(6d) の場合、*chandelier* は通例天井につるされると解釈されるが、対の後の文でそれが *cupboard* の中に入ったというので不自然な文となる。デフォルト解釈のうち (6c,d) のように、前文との関連で後に続く文の初出の名詞を既知情報のように扱う現象は橋渡し推論と呼ばれる。(6e) では彼女が実際には A の問いと関係なく、A・B 二人の待っている「バスが来ましたよ」や、その場に現れた「あの人は銃を持っている」の意味に解釈される。ここでは当面の話題よりその場で緊急性があり、より重要なことは誰もが注目するという暗黙で普遍的な人間の反応が働いている。

次は (1c) の用例をみてみよう。

(7) a. John is a politician, but he's honest. vs John is a politician, and he's honest.

b. A1: She always cleans the refrigerator very well.

A2: Can I have milk for my coffee?

B: There's milk in the refrigerator.

C1: that should have been cleaned up

C2: that would be suitable for putting in your coffee —— Berg (2002)

c. David cut his finger. The knife slipped. vs David cut his finger and the knife slipped.

—— Blakemore (1992:135)

d. 太郎は風呂を沸かしたが、沸かなかった。 vs *Taroo boiled the bath, but it didn't boil.

e. 国境の長いトンネルを抜けると雪国だった。夜の底が白くなった。信号所に車が止まった。

——川端康成『雪国』

(7a) の2文は *and* と *but* の違いにより *politician* の含意が異なる。(7b) はAとBの対話である。A1, A2のいずれを受けてBを発したかによりBの意味はそれぞれC1, C2を続けて発した意味となる。Bは場面によって異なる意味に解釈される。(7c) の2例は似ているが意味が異なる。最初の例は2文の語順よりも因果関係を優先し、ナイフが落ちたことにより指を切ったと解釈されるが、後の例は *and* が存在することにより時間的に指を切った後にナイフがすべり落ちたと解釈される。(7d) の日本語では「風呂を沸かした」という場合、通例風呂は沸いている。しかし直後に逆説の「…が」が続くと、「沸かそうとしたが」の意味に代わる。もっとも、英語では日本語のような取り消しは不可能である。(7e) の2番目の文だけを取り出した場合、意味不明であるが、2番目の文が最初の文に続くことにより「白く」と「雪国」が語彙的結束 (lexical cohesion) を示し、次に3番目の文が続くことにより、車がトンネルを抜けると、暗い夜空のもと地面が雪でおおわれていたと推論される。

4. 談話の場合

前節では複数の文が隣接することにより、個々の文の意味が確定し、一連のまとまりや結束性が強まることをみてきた。言語表現においてはさらに文を重ねることにより談話 (言説を含む) を形成し、話し手の意図・主張や価値観などを提示することで発話目的を達成する。その過程で聞き手は話し手の語りに賛同したり反発したりする。また、話し手は語りたものだけを語り、語りたくないものに口を閉ざし、聞き手は聞きたいものだけに反応し、聞きたくないものに耳を閉ざしたりする。本節は (1a) に対応して言語表現の不適格性や矛盾がどこから生まれるのか、(1b) に対応して非言語的要素が人の行動基準や偏見にどのような影響を与えるのか、(1c) に対応して言語使用者の関心や価値観などがどのように主張の違いや対立を生むのかをみていく。本節は紙数の関係でそれぞれ2例ずつ考察する。

まず (1a) の例からみてみよう。

(8) a. *Go down Washington Street. Just pick up your left foot, place it down in front of your right foot, transfer your weight from right to left foot, lift your right foot ...

—— Blass (1990)

b. お手伝いさんが台所でコップを手から落として、コップが割れてしまったとする。日本人はこのような時「私はコップを割りました」という。聞けばアメリカ人やヨーロッパ人は

「コップ（グラス）が割れたよ」と言うそうだ。もし「私がグラスを割った」と言うならばそれは、グラスを壁に叩きつけたか、トンカチか何かで叩いたような場合だそうだ。「私がコップを割りました」というような言い方をするのは、日本人にはごく普通の言い方であるが、欧米人には思いもよらない言葉遣いかもしれない。これは日本人の責任感の強さを感じさせる。自分が不注意だったからコップが割れたので、割れた原因は自分にある。そういう意味では自分が壁に叩きつけたのと同じである。そう思って「私が割りました」と言うのだ。そう思うと、この簡潔な言い方の中に日本人の素晴らしい道義感が感じられるのではないか。誰が言い出したか、教えたか分からないが、日本人にそういった気持ちを根付かせてくれた先祖たちに謹んで頭を下げたい。 —金田一（2000）

談話は主題（topic）提示・詳述（elaboration）・（時空の）連続性・類似性・因果関係・問題解決・まとめなどを軸に展開するが、その際、記述に一貫性が求められる。（8a）は道案内で例えば Follow Washington Street three blocks to Adams Street. とでもいえばすむところを不必要なまでに歩き方を詳しく説明している。それぞれの文が文法的に違反しているわけではなく、歩き方の説明で矛盾はないにしても、この文脈では Grice (1975) の「簡潔に順序だてて話せ」という様態の公理に違反して不適格になる。しかしこの場合、どこまでが簡潔な表現でどこから不必要にくどい表現になるか、その境界は程度の問題であり必ずしも明確ではない。（8b）は日英語の違いを人の道義心に結びつけているが、ここには少なくとも2つの大きな誤りがある。1つは日英語の特質についての事実誤認であり、あと1つは特定の言語表現を責任感や文化にまで直結させていることである（詳しくは兎玉2006a:102-105参照）。談話の不適格性や矛盾は談話での記述法・事実認識・総論と各論・理念と現実・原因と結果・主張・価値観・背景知識などの論理や一貫性などにみられる。

(1b) に対応する例をみてみよう。

(9) We can characterize the *commercial transaction frame*, informally, by constructing a scenario in which one person acquires control or possession of something from a second person, by agreement, as a result of surrendering to that person a sum of money.

—Fillmore and Atkins (1992)

(10) a. Prejudice is not merely a characteristic of individual beliefs or emotions about social groups, but a shared form of social representation in group members, acquired during processes of socialization and transformed and enacted in social communication and interaction. —Dijk (1984)

b. Blacks act in *mobs, crowds, factions, groups*. They constitute *millions* who live in *townships*, and *tribal homelands*. They *mass* in *thousands* and are *followers* of *nationalist leaders*. But Whites (who are also reported as committing violence) are individuals or *extremists*: by implication different from other (normal?) Whites.

—Stubbs (1996:95)

言語表現は記述する場面に応じて頻用される要素が変わってくる。（9）は商取引の一般的なフレームとして Fillmore and Atkins (1992) が説明したものである。二人は商取引のフレームに現れる要素として Buyer (one person), Seller (second person), Goods (something), Money (money) をあげ、それぞれの視点によって、結合する動詞が異なることを指摘した。例えば Buyer の視点からみると、Buyer は buy, spend, pay の主語、sell, charge, cost の間接目的語として現れる（詳しくは兎玉

1998:46参照)。何を話題とするかによってシナリオが作られ、そこで頻用される語句や意味上のフレーム網が形成される。フレーム網は言語知識や非言語的知識を動員し、§ 1 でみた「デフォルトによる特質継承の原則」などを適用して形成される。その結果、フレーム網は (10a,b) のような形で現れることもある。(10a) によると、偏見は個人や社会が共有する信念や感情であり、社会の中で変容し執行されているという。(10b) は南アフリカでの1970・80年代の暴動を報じた新聞記事の中で黒人や白人がどのような語で記述されているかを分析したものである。黒人と白人がステレオタイプ化し、イタリック体部分の語と結びついている。(10b) は広義のフレーム網に属するが、作為的に、または無意識的に作られた偏見でもある。これは Said (1978:3) がオリエンタリズムとは「オリエントを支配し、再構成し、威圧するための西洋の様式である」と断じたものと同類である。デフォルトに基づく特質継承によるものとはいえ、(10a,b) や「オリエンタリズム」などのフレーム網や偏見は、話し手の視点が無意識的な価値観とも密接に結合しており、(1b) と (1c) の区別は必ずしも明確ではない。

(1c) に対応して主張の違いがなぜ生じるかをみてみよう。

(11) a. Psychologists, sociologists, anthropologists, philosophers, and linguists have advanced the study of discourse without the common descriptive terminology, without the shared theoretical or methodological predilections, and without the set of paradigmatic studies around which a unified and cumulative body of knowledge can be constructed. Proliferation of contrasting paradigms in each of the above mentioned disciplines renders the possibility of comprehensive (and unifying) theory of language extremely remote. — Russel (1979)

b. 何故受け手は、言葉を聞き、読もうとしなくなったのか。戦争と言う究極の状況において発せられる声に、耳を塞ぐことを選んでいるのか。…発信する側は自分の言葉で発信しているのに、聞き手、読み手が自分の認識枠組のなかでしか、受け取っていないのだ。聞きたくない情報を聞かず、聞きたい言葉だけ選択して聞く。——酒井 (2007)

(11a) は心理学者・社会学者・人類学者・哲学者・言語学者に至る多くの人がこれまで談話分析を進めてきたが、共通の用語や方法論などが欠如しており、社会における包括的な談話分析理論が実現するにはほど遠いことを嘆いている。(11a) は30年近く前に主張されたものであるが、この状況は今もそれほど変わっていない。(11a) がどちらかといえば発信者の側の問題であるのに対して、(11b) は受信者の問題である。イラク戦争という究極の状況の中にあって中東の若者が切羽詰った思いを「聞き手の胸倉を揺さぶってでも伝え届けたい」と思っているが、それが言葉で伝わらないもどかしさを嘆いている。聞き届けられないとなったとき、残るのは言葉への不信であり、相手の胸倉を掴み、暴力にさえつながっていく。(11a,b) には発信者と受信者の違いがあるが、だれもが発信者であり受信者でもあり、(11a,b) の背後には共通の原因がある。今日、情報化社会とはいえ、だれもが自分の世界に閉じこもり、現実世界について共通の価値観や知識が広まっているわけではない。

価値観のズレや対立の広がり個人の間に限らない。公の場でも同様である。

(12) a. (「旧日本軍や官憲が直接間接的に関与した」と従軍慰安婦問題にお詫びした) 河野官房長官談話 (1993年) を受け継ぐ。ただし官憲が家に押し入って連れて行くという狭義の強制性はなかった。

- b. (参議院選に向けて衛藤前衆議員の自民党復党を認めたことについて特別扱いだとの不満が党内にくすぶっているのではという記者の質問に答えて) そんな不満くすぶっていませんよ。誰がいますか、特定の人、いないですよ。
- c. (松岡農水相が事務所費経費として本来無料であるはずの議員会館内の光熱水費に年間500万円あまりを計上したことに納得するのかと野党から質問されて) 松岡大臣は法律にのっとって処理しており、問題はない。

(12a-c) はいずれも安倍晋三首相の発言(2007年3月)である。(12a)は2007年3月にアメリカの下院が元慰安婦たちの証言をもとに旧日本軍の慰安婦問題に対して日本に公式謝罪を求める決議案を討議している時の発言である。河野談話より4年後の1997年には「日本の前途と歴史教育を考える若手議員の会」が結成され、安倍首相は当時その会の事務局長を務め、従軍慰安婦について記述した中学高校の教科書などを批判しており、(12a)では本音がつい口に出たのかもしれない。確かに日本はすでに過去に謝罪している。しかし今日の問題は強制があったかどうかではない。謝罪後の反省の中身や被害者の悲惨な経験への配慮のなさが問われている。(12a)は問題の本質からズレており、本当に反省していることばとは受けとられない。*Washington Post*紙(2007.3.24)はShinzo Abe's Double Talk(安倍晋三の二枚舌)の見出しで、拉致問題に厳しく従軍慰安婦問題に甘いと批判した。米国下院の外交委員会もこの問題について日本政府は歴史的な責任を公式に認め、謝罪すべきという決議案を圧倒的多数で6月に可決し、7月には本会議でも可決した。(12b)は安倍首相の古くからの同士で「若手議員の会」設立時の幹事長を務め、その後郵政民営化に反対して自民党を離党した衛藤晟一氏の例外的な復党を強く訴えた時のことばである。党紀委員会は異例の投票(10対7票)により復党を承認した。(12b)の発言は票決からもうかがえるように、党内の反応を隠蔽しようとするものであった。(12c)での松岡大臣は公にしたいくない政治活動費を光熱水費に付け替えたと考えられるが、光熱水費の内訳についてはいっさい説明しなかった。おそらく安倍首相も納得しないと思えるが、公式には松岡大臣をかばい続けた。その限りでは安倍首相も大臣と同じく説明責任を放棄している。「政治とカネ」の問題が政治への不信にもつながっている。

言説のあいまいさや不明瞭さは国際政治にもうかがえる。例えば2007年2月に北朝鮮を囲む6カ国協議で合意した共同声明である。参加6カ国の思惑は核放棄、国交正常化、拉致問題、経済支援などと互いに疑心暗鬼の中で合意文書だけは作成された。経済・軍事・政治・人道・地理において各国の状況が異なり、国によって優先順位に違いがあることは当然で今後も同様であろう。しかし問題は各国の状況の違いを克服する道筋が全く見出されないことである。共同声明は合意をみて5ヶ月過ぎた現在、何も実施されていない。上記の「安倍晋三の二枚舌」と同じように、米国を含む国連理事国にも二重基準の矛盾がみられる。国連の安全保障理事会を構成する5つの常任理事国はいずれも公式には世界の平和と安全を維持するという崇高な目標を掲げながらも、現実にはより多くの武器を外国へ売り込むことを競っている武器輸出大国である。

デフォルト解釈における(1a-c)の3種の区別は§2の文内の場合、明確に区別されるが、§3の文間、§4の談話に向かうにつれてあいまいになる。これは当然のことでもある。ことばを多く使う談話では(1a-c)の3種のデフォルト解釈が合体し、より複雑な背景知識や信念体系が関与するためである。逆にいえば、具体的に明示されない背景知識や信念体系が語・文から談話に至るあらゆる言語表現に埋め込まれていることになる。現実の言語活動ではこうしたデフォルト解釈が埋め込まれている言語表現をどのように用いるかが問題になる。ここでは言語活動の前提として2点

だけ触れておく。1つは何を語り、何を語らないかの問題であり、あと1つは今日ことばをどのように評価し、ことばに何を期待しているかということである。

第1の問題から簡単にみてみよう。言語活動において何を語り何を語らないかと言う問題は、何が談話や言説を形成するのかという問題でもある。一般に談話は話し手の意図・主張・価値観・視点などを聞き手に伝えるものであり、それが話し手・聞き手に共有された場合、相互理解が成立する。しかし話し手の意図・価値観などが常に聞き手と共有されるわけではない。両者が共鳴したり反発することで談話は展開する。その点はどの言語共同体においても変わらない。しかしどのように語るか語らないかの違いは諸言語の構造により、または個人や言語共同体によって違ってくる。

まず構造面から諸言語の違いをみてみよう。Hinds (1986) が指摘するように、諸言語は先行文脈との関係で大きく2種に分かれる。状況に焦点を当てる日本語型と人に焦点を当てる英語型の言語である。前者では先行文脈や場面との関係で話し手・聞き手に共有される既知情報はたとえ伝えたい情報の命題に必要な概念である主語や目的語でも自由に省略される。後者では行為主体者が重視され、たとえ既知情報でも主語・目的語・自動詞・他動詞などの文法関係が通例明示される。もっとも、日本型の言語ではその構造の特性から命題の行為者や対象がしばしば省略されるが、省略された語句が必ずしも常に話し手・聞き手に共有され、明確に意識されるわけではない。

(13) a. そこへ行きましたか。——はい、行きました。vs (?) あなたはそこへ行きましたか。
——はい、私はそこへ行きました。

b. 戦争[地震・台風]が起きた。／戦争[地震・台風]があった。

c. 太郎は戦争[病気]で死んだ。vs *?太郎は戦争[病気]で殺された。

d. 安らかに眠って下さい 過ちは繰り返ませぬ——広島原爆死没者慰霊碑の碑文

(13a) では省略されている主語が誰であるかは話し手・聞き手に共通に認識されており、主語を省略するのが普通である。(13b) では人の起こす「戦争」が自然現象と同じ動詞と結合し、(13c) では英語の *Taroo was killed in the war.* に対応する日本語は不自然である。(13d) では過ちを犯したのは日本なのかアメリカなのかの論争がかつて戦われたが、今日では「人類」をその主語とする解釈が生まれている。省略を多用する言語においてこのようなあいまいさが多いことは不可避である。

何を語り何を語らないかは個人や言語共同体によっても違ってくる。通例前者は個人の文体、後者は言説の秩序として現れる。例えば同じ詩人でも谷川俊太郎と茨木のり子の文体を比べてみよう。谷川は擬音語や擬態語や語呂合わせの名手であり、ことばあそびともいえるノンセンスなものに大切なものがあると考えている。一方、茨木は谷川と同じく観念語や字画数の多いむずかしい漢字は避けているが、谷川のような擬音語や語呂合わせなどは用いず明示的な意味をもつ日常語で詩を書いている。二人は文体や手法が異なるが、同じ「権」の同人でことばを介しての「美しさ」や「日本語のなつかしみ」を求めている点では共通している。

言語共同体はそれぞれ独自の「言説の秩序」を形成していく。言説の秩序は共同体の用いる言語構造と無縁ではない。(13) が示しているように、先行文脈との関係は日本語型の言語では省略で合図され、英語型の言語では代名詞や代動詞などの代用語や定 (definite) 表現で合図される。この違いは日本語が文脈に敏感に反応し、英語が客観的な命題を明示する特徴にもつながっている。状況焦点の日本語は話し手と聞き手・周囲との関係で成立する対人関係機能や対象依存性に敏感であり、話し手の主観を示すモダリティを重視する。さらに文脈上わかりきったことは表現する必要がなく、言外の意味を察することが大事であり、それをことさら言うのはくどくて角が立ち、野暮で

あるとさえ感じられたりする。日本語[人]は(13)のような特性をもつ表現を日常的に繰り返すうちに、日本の言説は行為(者)や因果関係についてあいまいな表現に寛容になったり、命題に関する明示的な主張や論理に対して拒否反応さえ示したりする。こうした日本語と対照的に、人焦点の英語は対人関係機能や対象依存性には相対的に鈍感であるが、客観的な命題を構成する概念の区別立てに敏感であり、あいまいな表現や言説はしばしば厳しい批判の対象となる。

言語構造がどのようなものであれ、どの言語も同じ命題やモダリティを表現することができる。先ほど言語構造が言説の秩序と無縁ではないと述べたが、(13)のような言語構造があいまいさを特徴とする言説の秩序と直結するわけではない。日本語型の言語構造をもつ朝鮮語やモンゴル語の世界が日本と類似の言説の秩序をもつとは必ずしもいえない。究極的に話し手の意図をどのように表現するかは言説上話し手の主体的な問題である。したがって個人の文体や言説の秩序の違いは単に言語構造上の違いによるものではなく、ことばに何を託すかの違いによるところが大きい。(12)との関連では政治の世界で用いられるあいまいな言説がしばしば二重基準や隠蔽として批判されることをみてきたが、こうしたあいまいな言説も何を語り何を語らないかの主体的な意図に由来するものである。

第2の問題として、われわれは今日ことばの力をどのように評価し、ことばに何を期待しているのだろうか。(10) — (12)からも示唆されるように、ことばの力に対する評価は下がりこそすれ、上がることはない。情報化時代といわれながらも、情報を運ぶことばそのものの力に疑問がもたれている。その現象は論壇や政治の世界に限らない。加藤(2004:74-93)は人がなぜ本を読まなくなったのか、その理由を問うている。読書はかつては多くの人と情報を共有でき、読むことの「面白さ」があったが、今はこうした読書経験の輝きが痩せている。これは先進諸国の局地的現象であるが、人間社会が辿る普遍的な道であり、現代は文明史的な大転換を背景にしているという。本を読まなくなった状況と併行して、テレビ・アニメ・インターネットなどが盛んになり、今や視覚優位の時代を迎えている。竹内(2005:10)は『人は見た目が9割』と題して、人間が伝達する情報の中でことばが占める比率は7%にすぎないともいう。

今日ことばはますます軽くなっている。視覚優位の状況は言語への不信や思考回路の変化とともに進行している。映像や音声による視聴覚情報は読む文章ことばに比べて直接的であり、少ない労力で「理解」される。枠内の映像を「理解」しても、映像のすぐ側の枠外の状況に思いを寄せることは少ない。表面的・即物的な情報に満足し、抽象化や想像を要する思索を敬遠していく。視聴覚情報が少ない労力で得られるだけに、この傾向をくい止めることは容易ではない。ことばへの信頼が薄く、ことばの力の弱い世界はことばを介しての思索による抽象化や想像の世界の対極にある。今日われわれの思考過程は大きく変化しているのかもしれない。

ことばへの信頼がなくなったところでは主張の違いは確執をかもすほど正面から対峙することもなく、単に関心や価値観の違いとして片づけられる。認識の隔たりを徹底してつめることもなく、主張の違いや対立はあいまいなまま時とともに消えていく。この傾向は特に日本(語)で強い。古くから依言真如より離言真如を優位に置き、ことばを超えた世界をつくりあげてきた。その結果、今日ではあいまいさが「言説の秩序」の特徴となっている(詳しくは児玉2006a,b参照)。抽象化や想像にはデフォルト解釈と同じく多くの要素が背後に含まれている。抽象化や想像、あるいはデフォルト解釈の範囲を狭め、思索やデフォルト解釈の能力を弱めることはことば自体の力を弱めるという悪循環にもつながっていく。

5. おわりに

従来の言語学はしばしば文を最大の単位とし、具体的な言語表現から出発してその生成解釈の過程を分析することに終始してきた。しかし言語学が今日の閉塞状況から脱出し、多様なデフォルト解釈を必要とする言語表現の全体像に接近するためには、単に分析対象を談話にまで拡大するだけでなく、言語表現を形成している不可視的な背景知識や信念体系を考察することが不可欠である。これまで言語学は不可視的なものに決して無縁だったわけではない。具体的な表現を分析対象としながらも、抽象的な言語普遍性や認知原則を究明してきた。言語普遍性や認知原則がどちらかといえば生得的な能力に由来するのに対して、背景知識や信念体系が生後の経験に由来するという違いはあるが、いずれも不可視的な点では変わらない。今日の言語学が分析対象拡大の課題に応えるためには、一方では言語表現として談話全体や言説まで範囲を広げ、他方では不可視的なものとして言語表現を背後から支えている社会文化的な因子を含めて分析する必要がある。

20世紀後半からの言語学は用例にアスタリスクや疑問符などを付してその用例が不適格または不自然であることを示した。この表記法の導入によって適格で自然な用例の条件がより厳密に規定され、言語構造の特徴がより正確に記述されるようになった。同じように、デフォルト解釈を言語分析に定立することにより、生得的なものであれ後天的なものであれ、言語表現を支える不可視的な実態が浮き彫りにされ、言語表現や言語活動の全体像がより身近なものになるであろう。具体的にどのような点が明らかになるのであろうか。

第1に言語表現において形成されるフレーム網が明らかになる。デフォルト解釈を進めるためには概念や命題のフレーム網が前提になっているためである。第2に(1a-c)の作業を進めるなかで表現されるものと表現されないものが区別されるが、表現されないもののなかでどのような情報が表現されたものと同じか、あるいはそれに準ずる資格で表現に関与するかが明らかになり、言語知識や言語構造の見直しも必要になるであろう。第3に個人の文体や言語共同体社会による言説の秩序が推論過程を含めて議論されることになる。第4に語りたいたいものと語りたくないもの、耳を貸したいものと貸したくないものを区別することにより、談話や言説の意図・主張や話し手・聞き手の背景知識や信念体系がより正確に把握されることになる。第5に抽象化能力や推論能力を整理し、思索や行動のメカニズムに接近することができよう。

前節の末尾ではことばの力を視聴覚情報と対立するものとして捉えたが、両者は常に対立するものではない。例えば文藝などで両者が相乗効果を高めながら共存する世界もある。しかし日常のコミュニケーションでは通例一方の力が高くなれば他方が低くなるという競合関係にある。両者が相補的に共存する方法はまだ見つかっていないし、将来それを見出すことは困難かもしれない。だからといって、このままことばの力が弱まるに任せるわけにもいかない。ことばが思索や行動の源泉として機能してはじめて人はことばを介して互いの意図・主張・価値観などを理解し共有することができるためである。ことばの復権は21世紀の課題である。

引用文献

- Berg, J. 2002. 'Is semantics still possible?' *Journal of Pragmatics* 34:394-359.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell.
- Blass, R. 1990. *Relevance Relations in Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dijk, T.A. van. 1984. *Prejudice in Discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- Fillmore, C.J. and B.T. Atkins. 1992. 'Toward a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbors' In A. Lehrer and E. Kittay (eds) *Frames, Fields, and Contrasts* 75-102. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.
- Grice, H.P. 1975. 'Logic and conversation.' In P.C. Cole and J.L. Morgan (eds) *Syntax and Semantics 3: Speech Act* 41-58. New York: Academic Press.
- Hinds, J. 1986. *Situation vs Person Focus*. 東京：くろしお出版.
- Hudson, R. 1990. *English Word Grammar*. Oxford: Blackwell.
- Jaszczolt, K.M. 2005. *Default Semantics: Foundations of Compositional Theory of Communication*. Oxford: Oxford University Press.
- 加藤典洋. 2004. 『語りの背景』東京：晶文社.
- Kehrer, A. 2002. *Coherence, Reference, and the Theory of Grammar*. Stanford: CSLI Publications.
- Kempson, R.M. 1975. *Presumption and the Delimitation of Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 金田一春彦. 2000. 「日本語のこころ」日本エッセイスト・クラブ（編）『日本語のこころ』東京：文藝春秋.
- 児玉徳美. 1998. 『言語理論と言語論——ことばに埋め込まれているもの——』東京：くろしお出版.
- . 2002. 『意味論の対象と方法』東京：くろしお出版.
- . 2004. 『意味分析の新展開——ことばのひろがりに応える——』東京：開拓社.
- . 2006a. 『ヒト・ことば・社会』東京：開拓社.
- . 2006b. 「言語学は分析対象をいかに拡大できるか——閉塞状況からの脱出に向けて——」『立命館文学』596:1-20.
- . 2007. 「依存関係の見直し」『立命館文学』601:35-49
- Lakoff, R. 1971. 'If's, and's, and but's about conjunction.' In C.J. Fillmore and D.T. Langendoen (eds) *Studies in Linguistic Semantics* 115-150. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Levinson, S.C. 2000. *Presumptive Meanings*. Oxford: Oxford University Press.
- Russel, R.L. 1979. 'Speech acts, conversational sequencing, and rules.' *Contemporary Sociology* 8:176-179.
- Said, E. 1978. *Orientalism*. Hamondsworth: Penguin Books.
- 酒井啓子. 2007. 「聞き届けられない言葉の果てに」『言語』（3月号）4-5.
- 竹内一郎. 2005. 『人は見た目が9割』東京：新潮社（新潮新書）.
- 安井 稔. 2004. 『仕事場の英語学』東京：開拓社.
- Wada, N. 2001. *Interpreting English Tenses: A Compositional Approach*. Tokyo: Kaitakusha.

(本学名誉教授)